

が今後どうなってくるのか、いくつか見えてくることがあります。最初の定義のところで申しあげた通り、私が出会った息子介護者は、第三者が「これは息子介護者のケースである」といったケースです。そのなかには独身で、家事を含め何から何まで自分でやっている息子介護者も含まれていましたが、家事はやっていないが主にADLの世話をやっているのです、これは息子介護であると、第三者の専門家が認めている人もいました。それを通して分かることは、少なくとも私たちの認識のなかに、親の主介護者は誰かを判定するときに、家事は必ずしも入っていないということです。もし家事が入っていれば、家事をまったくやっていない息子が、主介護者といわれることはなかったはずで

最初に立てた問いに戻りましょう。もし既婚の息子介護者が、このままで増えていき、夫は夫で自分の親を看る、妻は妻で自分の親を看る、ということが増えれば、夫婦の間のケア労働の分配はどのようになるのか。歴史的にみれば、変わったと言えると思います。昔の夫婦のケア労働の分配・介護の分配と、今の夫婦のそれぞれが自分の親を看ているケースは違うからです。しかし、今の1つの夫婦を介護前と介護後で比べてみれば、どうでしょうか。夫の方は、自分の親が要介護になったのでケア労働が増えた、といえるかもしれませんが、妻の方はどうでしょう。残念ながら変わっていません。昔から、介護前も介護後も同じように家事をやっている、という状態は変わっていません。だから変化していないということが正しい。それどころか、同居している夫の親が要介護になったら、洗濯物は増えるかもしれないし、高齢者のための食事を特別に用意する手間が増えるかもしれません。負担が増えているかもしれません。

親の介護というケア労働の担い方が夫婦で変わったとしても、それ以外のケア労働の分配はまた別の話です。今は既婚の息子介護者を取り上げましたが、恐らく独身の息子介護者はまったく違うことになるでしょう。同じ親のケアをしながら働くといっても、結婚している旦那さんが自分の親を看ながら働くということと、娘さんの方が結婚して自分の親を看ながら働くということは、家事の問題を考えると全然違うことになるはずで

誰にとってもどのようなケア労働なのか、どのような男性のケア労働なのか、というところを考えないと、ケア労働といって1つでまとめられない部分があります。そういうところも注意して、男性のケア労働を考えていく必要があるのではないか、ということが私の報告の結論です。以上です。ありがとうございました。

## 「家庭内の非対称性」

永井 暁子

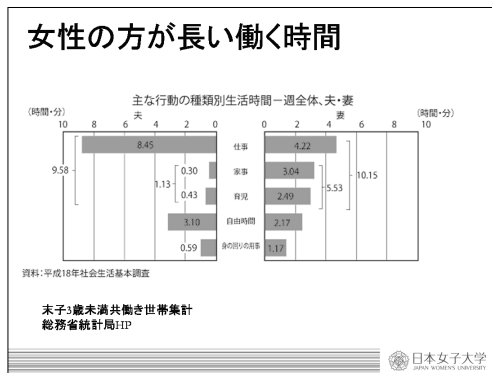
永井：こんにちは、永井です。よろしくお願ひいたします。女子大の人間社会学部の社会福祉学科にあります。小学校1年生の息子を持つ母親でもあります。天田先生のお話は日常生活で重なるところが多く、コーディネーターという立場を忘れて聞き入ってしまいました。

私は、家族社会学を研究しておりまして、最初に書いた修士論文は「共働き夫婦の家事

遂行」でした。なぜそのテーマにしたかと言いますと、自分の父は家事をするのに、なぜ他のお父さんは家事をしないのだろう、という疑問が子どもの頃からあったからです。それから現在まで、小学生のときに感じた疑問が今まで続いています。そのお陰で、自分も研究者生活が続けられるのかもしれませんが、日本社会もあまり変わっていないということに驚きを持っています。

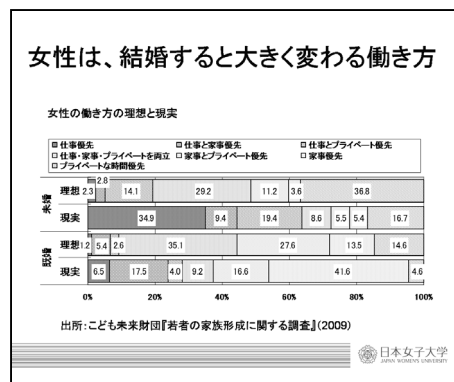
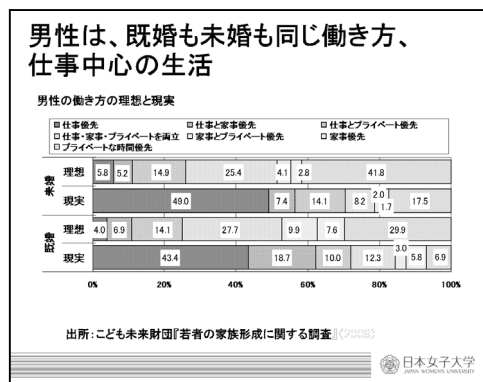
本日は、家庭内の非対称性ということでお話をさせていただきます。まだ十分に練れた議論ではありません。どちらかと言えば、話題提供に近いお話になるかもしれません。自分自身の漠然とした疑問について、皆さんと一緒に考えていければと思っています。

日本では、男女で異なった働き方をしています。実際の働き方の違いは明らかで、正規雇用や非正規雇用、フルタイムやパートタイム、というような就業形態の違いでもありますし、正規雇用であったとしても、労働時間が非常に違うこともあります。その結果として、職位の違いも反映されていることは、よく指摘されています。実態の違いと同時に、希望する働き方は男女で違うのか、ということにも気を配っていかなければいけないと思っています。家事時間も含めると女性の方が働いている時間は長い、と昔からよく言われていたと思います。総務省の統計局のホームページにあがっているものを見ていただきます。これは末子3歳未満の共働き世帯を分析対象として集計したものです。



男性の働く時間は、仕事の時間や家事・育児の時間を合わせると9時間58分。それに対して女性は、10時間15分。女性の方が長く働いていることになります。そして、家事や育児の時間を見ても、やはり女性の方が非常に長い時間を担っていることがよく分かります。

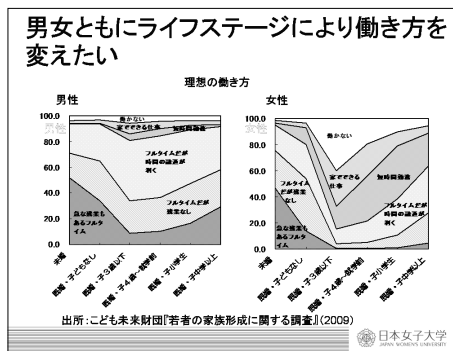
男女それぞれの働き方のタイプについて、見てみたいと思います。次に見てもらいますのは、2008年にこども未来財団が行った若者の家族形成に関する調査です。調査対象は、20代後半から30代後半の男女です。



男性の働き方の理想と現実ですが、未婚と既婚であり大きな違いがないことが、ここでのポイントとなってきます。もう1つのポイントは、理想と現実が大きく異なるということです。仕事優先を理想としている人は、未婚でも既婚でもあまりいないということです。それでは、家族が優先かと言えば、そうでもありません。男性の場合は、「プライベートを優先する」という人が非常に多く占めています。未婚では41.8%、既婚になると多少下がりますが、29.9%、3割ぐらいいます。男性が、必ずしも仕事を優先することを望んでいるわけではありません。ここで見ていただきたいのは、結婚後はどうしたいか。結婚したからといっても、希望が大きく変わるわけではありません。現実と理想はそれぞれ違っていながらも、未婚と既婚で現実が大きく変わらず、「仕事優先の生活をしている」と回答した人は、未婚で49%、既婚で43.4%です。既婚のなかには、仕事と家事優先が少し増えて、18.7%です。ポイントとしては、現実でも未婚と既婚はやはり大きな違いはありませんが仕事中心の生活であるということです。

それに対して女性はどうかというと、結婚すると働き方が大きく変わるということです。未婚女性の、理想とする働き方は男性と若干は似ていて、男性と同じように36%ぐらいの人がプライベートを優先したいと思っているようです。既婚の場合は、男性と違って家事を優先する方に重みが出てくることになります。そして現実に関しては、未婚の場合、男性も女性もほぼ同じで仕事優先です。それに対して既婚の女性の現実、仕事優先の割合が減り、仕事・家事・プライベートの両立が非常に増えてくる。その辺りの違いがよく見えるかと思えます。

男性の方がプライベートを充実させたいとする割合が結婚しても多く、家族志向が低い人が少なくないように見えますが、これをライフステージ別にみえますと、若干違った面もみえてきます。ライフステージでどのような働き方をしたいかは、男性と女性で大きく違っていますが、男女ともに、ライフステージによっては働き方を変えたいと希望しているのです。



男女共に未婚の場合では、残業もある働き方、バリバリと仕事中心で働きたいという人は、結構な割合でいます。結婚するとどうでしょう。残業もあるような働き方がいい、と言う人の割合は減っていきます。女性は、結婚した時点で、残業のある働き方は避けようとしていることが分かります。子どもが3歳以下の女性の場合には40%ぐらいの人が働かない選択肢が理想である、と考えています。その一方で、逆に言えば、60%ぐらいの人は、テレワークのような仕事や短時間勤務や、フルタイムだけど時間の融通が利く仕事、フルタイムで残業がないような仕事で働きたいといったように働くことを望んでいます。

それから子どもの成長に伴い、さらに多様な働き方を求める人が増えていきます。ここで

言いたいことは、男性に関しても、残業のある働きかたを望んでいるのは、やはり子どもがいないステージまでです。子どもができてからは、基本的にはフルタイムだけど、残業はない、時間の融通が利く仕事がいい、そういった柔軟な働き方を望む男性が増えていきます。そして子どもの成長とともに、残業のある働き方でもいいという希望に変化してきています。

もし働き方に関する男性の希望を叶えると、どういったことになるのでしょうか。まず言えることは、男性の参入により子育てが楽になるでしょう。現時点では、女性は、働かないことを希望する人が4割ぐらいいますが、母親である自分一人で子育てしなければならないという前提の下での選択です。子どもがかなり成長しても、短時間勤務がいいという人もかなりまだ多いのですが、もしかすると男性の働き方が変わってくると、女性の働き方の希望も変わってくるのではないかと思います。

もう一点は、社会における育児コストが低くなるのではないかと、ということです。育児をすることで女性がひとたび労働市場から離れると、日本の場合、その能力を開花させることもなく終わらせてしまうことになります。逆に言えば、育児コストが社会で非常に高いのではないかと、ということです。子育てを社会化させていくことが必要なのですが、そのためには当然コストがかかっていくわけです。保育園の待機児童を減らすことももちろん必要ですが、例えば病児保育や夜の保育に力を入れるよりは、父親の育児を投入すること、柔軟な働き方を認めることにより、社会的なコストを減らすことができるのではないかと思います。

私は昨年の1年間、サバティカルをいただいて、デンマークにいました。北欧諸国とは社会システムの違いも大きいことを承知していたのですが、それでも非常に驚いたことがありました。首都のコペンハーゲンでヒアリングに行った先は、保育所に入れない人が相談に行く市の窓口です。デンマークの保育園の開園時間は、朝だいたい6時から6時半、あるいは7時ぐらいから17時までです。基本的に延長保育はありません。延長保育がある保育園は非常に珍しく、デンマークの第2の街のオーフスは、駅の近くにある保育園の1つのみが20時までです。その唯一の保育園においても、20時までの延長保育の利用者はごく少数です。コペンハーゲンは首都ですから、国の様々な機関が集まっており、夜遅くまで国際的な活動があるでしょうから多くの利用者がいるかと思いましたが、現実には違いました。17時以降開いている保育園は453施設中52施設のみで、オーフスでもそうですが17時以降開いているとはいえ利用者はそう多くはありませんでした。24時間保育は1カ所だけで、土日開いているところは6カ所だけでした。そこを利用できるのは、夫婦共に深夜勤務の日、あるいは夫婦ともに休日出勤の日だけで、実際の利用者はかなり少ない。延長保育をしなくても子どもを育てられる環境を整えば、その方が社会における育児のコストが低くなるのではないのでしょうか。また、家事育児にかかわることが前提で生活することは、天田先生、土堤内先生のお話にも関連してきますが、男性の生活能力を高めるのではないかと、思っています。育児というきっかけから、様々な

情報収集やネットワーク作りや、子どもとの関わりなどを通じ、生活していくための能力が磨かれていくのではないか、ということを考えました。

共働きの家事遂行という論文を書くにあたり、そもそもなぜ男性が家事をしないのか、ということが謎でした。どうやって男性は家事を拒否できるのか。これまでたくさんの調査を実施しデータを分析していますが、アメリカの研究では、夫婦間での公平感や妻の夫婦関係満足度において、夫が家事をするかどうかということは重要な問題なのです。日本では、夫の家事は、妻の夫婦関係満足度や夫婦間の公平感において、分析上では影響力がほとんどありません。日本の場合は何が影響してくるかと言いますと、育児なのです。夫が育児をせず、子どもに関心を持たないと、妻の夫婦関係満足度が低くなる。日本では当たり前だろうという気もしますが、家事はほとんど関係ないのです。家事が夫婦関係満足度に関係してくるのは、どちらかと言うと男性です。

妻の家事の量が多いと満足度が高まるのが男性です。今日のシンポジウムの前半は、家事遂行度、ケア度の高い男性のお話でしたが、全国で普通にサンプリングをした調査では、既婚男性はほとんど家事をしないという状態です。25年前に私が修士論文を書いた時に実施した調査では、家事項目を40項目ぐらい並べ、特定の平日と休日、当日に1回でも行ったものに丸を付けてもらいました。まず調査を依頼をする玄関先で、奥様から「家事分担？しないよ、そんなもの。」と言われました。「ご主人が家事をしていなくてもいいので回答してください」と言って調査をお願いしていたものです。じっさいに集計してみると、共働きだけで調査したにも関わらず、「皿を下げる」という項目も含めて1つも○が付いていない男性が、4分の3という状態でした。今は若い人たちの間では、食洗機に食器を入れてくれるというところまではするようになりつつあるかもしれません。先ほどの夫婦関係満足度の分析結果は、あまりにも夫の家事遂行度が低過ぎて夫婦間の問題にならないからではないでしょうか。つまり、日本の妻は諦めているだけなのです。夫が家事をすればするほど妻の怒りが増すというのは、様々なネゴシエーションのなかで、ゼロのところから1になり、1が2になった、という低いところでは諦めの方が強かったのが、やっと不満を言える状況になってきた、というのが現状ではないかと考えています。なぜ夫の家事に対する妻の満足度が上がらないのか。家事をする夫があまりにも少なく、やはりまだ当事者意識が薄い、ということではないかと思います。家事をする男性に関する分析は、家族社会学の内田氏も行っていますが、彼の行ったインタビューの結果では「妻が望むから」という意見が結構ありました。「家族だから当然」という人と「妻が望むからする」という人がいて、協業的な意識でやっている人もいれば、「妻のため」にしている人もいます。まだ当事者意識は薄いのではないかと思います。家事に関連して、これまでたくさんの議論がなされていますけれども、時間がありませんので割愛させていただきます。

どういった意識が、夫を家事や育児や介護に向かわせることになるのか、ということを考えてみました。協業的な意識にあるならば、非対称性は基本的には起こり得ないはずな

のですが、家事の見積もりが悪いと結果として非対称になってしまう。男性はもともとの算段の間違ひがあることに対して妻たちは怒っているのだと、先ほど天田先生のお話をうかがって、あらためて気付かされました。

ですので、ここでは見積もりの甘さが結果として男女の非対称性を招くという点はあえて除外して考えることにしますが、夫が仕事で妻が家庭という分業体制であったとしても育児に関しては、それは夫婦間で非対称性を許す、つまり父親が子育てへの関与を拒否する理由にはなり得ないのではないかと考えています。また、家事のなかにも男性的な家事や女性的な家事という分類があります。例えば、家事の調査をするときに、アメリカの調査では「男性的な家事、女性的な家事という項目を入れましょう」という議論がなされます。ペンキ塗り、車の手入れ、家を修理するなど、そういったものが入ってきます。しかし日本では、田舎では車はあるでしょうし、北海道なら雪かきがあるかもしれませんが、ペンキ塗りはしませんし、賃貸マンションで壁に釘を打つと大家さんに叱られるでしょう。昔と違って今の日本では典型的な男性的な家事というものがないので、分業体制の下では男性を家事に向かわせるのが難しいかもしれません。

一方、育児に関しては、父親特有のあるいは母親特有の役割という意識がなければ育児全般を父親母親にかかわらず、親として子どもに関わっていくことになると思います。分業的な意識なら、父性的な育児、母性的な育児という考え方がありますので、やはり父は何らかの育児を担当する。つまり、分業的であっても協業的であっても、父親が育児を拒否する理由はないはずで

す。介護に関しても同じように考えてみますと、イエ意識が薄れた今、妻は嫁の位置にいないとすると夫婦間で分業するという仕組みにはならないので、自分の親を自分が介護することに当然なるでしょう。先ほどの平山先生のお話に出てきたように、分業はきょうだい間での分業が前提になりますから、介護は夫婦間の問題から本来的に切り離されるはずで

す。つまり、分業的な意識の夫婦であっても、育児や介護を、特に育児を男性が拒否する仕組みはないはずなのに、なぜ現状のような非対称的なことが起きているのでしょうか。家庭内の非対称性は、男女の働き方と結びついていることが拭えないと思います。家庭内の非対称性は、社会のなかでの非対称性と結びつき、それと共に社会の非対称性はまた家庭内に循環する、という仕組みになっています。この非対称的な家族にあるケアや生活保障のシステムは、ひとたび家族が機能しなくなった場合には、非常に厳しい状況を、私たちにもたらしめます。これはやはり家族の逆機能と言われる側面と結びついているのではないのでしょうか。

このような非対称性の解消に向けて、家事育児に関しては、夫、妻のどちらか一方が行わないということは実は効率の悪いことであって、やはり夫も妻も、あるいは男性も女性も、家事や育児に向かっていくことが、そしてそれは社会からサポートされるべきだと思います。しかし、それについては、前提となる働き方の問題を解決することが重要でしょう。また、親の介護は、家庭内では本来、夫婦間で非対称的であるべきなのではないか

と思います。そうであるならば、なおさら社会で介護する体制が必要なのではないでしょうか。論点の提示に過ぎないかもしれませんが、お聞きいただきまして、ありがとうございました。

## 質疑応答・ディスカッション

**司会：**それではこれからディスカッションに入ります。先ほどお話しいただきました、基調講演の天田先生と、土堤内先生、平山先生、永井先生、それから現代女性キャリア研究所の所長である大沢先生に入ってください、5人の先生方でディスカッションを行っていただきます。これ以降のコーディネートは、永井先生にお願いしておりますので、よろしくをお願いいたします。

**永井：**では、まず本日ご登壇いただいた先生それぞれに、言い足りなかった点を補足していただければと思います。また他の先生へのコメントやご質問などがございましたら、加えていただければと思います。よろしく申し上げます。

**天田：**報告時間が少し短かったこともあるので、いくつか補足説明させていただきます。お伝えできなかったのは、シングル息子の介護についてです。平山さんの報告にもありましたが、息子介護と言っても、シングル息子の介護と既婚息子の介護の割合は半々ぐらいです。この点については、春日キスヨさんをはじめ、素晴らしい研究がいくつかありますので割愛しましたが、少しだけ補足させていただきます。

息子介護における2大生活インフラは何なのか。1つ目は、「会社」です。生存・生活インフラという意味でも、会社という資源は極めて重要ですが、それプラス、本人のアイデンティティや心理的・社会的バランスを保つという意味でも、少なくとも息子介護者にとっては会社が重要なインフラ・リソースになっています。2つ目は、「妻」です。永井さんが言われていたように、妻が「生活能力スキルの肩代わり」をしていることが多いのです。妻が生活能力を補ってくれたり、「縁の下の力持ち」になってくれたりしています。このように息子介護においては、会社と妻が2大インフラとなっています。

それらが両方とも欠けている事態に晒されているのが無職のシングル男性です。大きく変容しつつあるとはいえ、男稼ぎ手モデルが中心の戦後日本型雇用システムにおいて、会社から生存・生活が保障されず、男稼ぎ手を前提に妻が家族生活を中心に担っていくという性別役割分業モデルにも合致しない、無職のシングル男性は、男性介護者が生活をするうえでの2大インフラそのものへのアクセスを欠いています。そうすると、生活の面でも極めて不安定で、本人のアイデンティティもズタボロの状況で、なおかつ、各種生活スキルがないゆえに情報も入らずに孤立していき、親とも抜き差しならない関係へと陥っていく。こういった事態に陥ることになります。無職のシングル息子と既婚の息子介護は、